

幼 兒 教 育

第二十卷
第九號

大正九年九月十五日發行

良い兒に現はれる徴候に就いて

奈良女高師教授 桑野久任

この兒が良い兒であるか悪い兒であるか、それは神ならぬ人の心で容易にわかるものではない。しかし日一日と發展して來る兒童の身心の表現が、果して良い徴しであるか、はた又悪い兆しであるかは、略その判断がつくことであり、又それが養育上頗る大切な事と思はれるから、今こゝに誕生から滿三年位までの兒童に現はれる、良い徴しと思はれるものゝ主なものを、書き列ねて説明してみやう。

(甲) 乳兒に就いて。

(一) 血色の良いこと。

うす紅いのは良い、蒼白いのは良くない、血色の良いことは健康の徴候である。

皮膚が薄いので血の色が透いて見へるから、乳兒の

血色は淡紅いのが常態で、蒼白いのは、全身が貧血して居るか、又は皮膚の血液が減少して居るかを示すものである。平素皮膚の血量の少いのは、内部に鬱血して居る證據で、恐らく既に病があるか、又は病に罹る始めかである。貧血にもいろいろあるが、多くはヘモグロビンの減少に基づく。

(二) 堅く太つて頸部や肢部に贅の多いこと。

皮下脂肪がたつぷりあつて肥え太り、堅くしまつて張りのあるのは良いが、ぶくぶく太りはあてにならない。又頸や上下肢(てあし)に深い贅の澤山あるのは良いが、この贅が少いか又は全く缺けて居るのは、榮養不良の徴しである。

かやうな太り方は、大人や年長の兒童では病的であるが、乳兒では生理的である。榮養の良い兒は、生

れ落ちる時から既にふつくり太つて居る。處々に贅が出来るのは皮下脂肪の多いためである。贅の所が深く窪むのは、丁度そこだけ、皮膚と筋骨とが密接して居るため、脂肪の溜る餘地が無いからで、恰かも蒲團のとちた所だけが窪むのと同理である。

往々非常に肥えた兒がある。これは皮下脂肪の多過ぎるもので、その太り方が病的であることは、素人眼にもすぐわかる程のものである。又かやうな兒は、齒の生え方が遅いとか、這ひ出しが遅れるとか、何か他に發育の悪い所があるものである。

(三) 皮膚に弾力あること。

皮膚を撮んで放すとびんと戻る。弱い兒ではさういかない。

(四) 體重が人並みより重いか、又はそれより軽くないこと。

誕生當時の平均體重は約八百匁(女の兒は稍々軽い)で、五ヶ月目にはその約二倍、滿一年にはその約三倍になる。

體重がそれより重いのは無論結構であるが、それより少々軽いとて心配するには及ばない。こゝに示したものは平均數である。既に平均數である以上、そ

れより多いものもあり、又それより少ないものもあるは當然のことで、しかも人數から云へば、この數又はその前後に在るものが最も多いわけであるから、その邊が即ち人並みと云ふべきである。しかしこれを距ることが著るしく遠いのは、斷じて不良の徴候である。

又體重ばかり如何に重くても、血色が悪いとか、ぶくぶく太りであるとか、元氣が無いとか云ふやうに、他の良い徴しが缺けて居る時は注意を要する。脂肪太りや、水ぶくれの良くないことは云ふまでもない。脂肪太りに就いては既に述べた通りである。水ぶくれは、乳粉で養はれたり、滋養糖などを過量に加へた牛乳で育てられたりすると、食餌中の炭水化物が多過ぎるため、乳兒の體内に過剰の水分が蓄へられる現象で、體重は増すが健康は下り、傳染病などに罹るあてが多くなる。

(五) 體重がずんずん増加すること。

乳兒は胎兒について最も生長の盛なものであるから、其の體重は日々増加してゆくのが常態である。若し、或は體重の増減が不定であるとか、或は體重の増加が停止するとか、或は却つて體重が減少する

とか云ふやうなことがあれば、それはいづれも警戒すべき徴候である。牛乳で養はれる兒に對しては、この注意が特に必要である。

但し誕生後二三日の間は、體重が次第に減少する、これは飲む乳量が少い上に、胎便が下つたり、排尿・發汗・呼吸などで水分を失つたりすることが多いため、其の減量は略五十匁から八十匁までの間に在る。この減量は一週間前後に恢復するのが常態であるが、十日以上になつてもまだ恢復しないのはよろしくない。

(六) 新らしい姿勢を執ることが、人竝みより早いか、又はそれより遅れないこと。

乳兒は七八ヶ月になればなげ坐りし、滿一年前後になれば手放しで立つことが出来る。頸も生後二三月間はぐらぐらするが、遅くも四ヶ月の末までには確實に固定する。しかし半年過ぎても頸がきまらなどうか、一年たつても坐れないとか云ふことは、人竝み外れて發育の悪い兆しである。

乳兒に限らず、凡て人が一定の姿勢を保つ爲には、感覺器と神經系と筋肉系との協力を必要とする。即ち、若し少しでもある方向に屈がることがあれば、

感覺器からその報告を受けた小腦の中樞が興奮し、直ちに其の方向と反對の側に在る筋肉に命令を下して收縮させ、これを元の位置にひき戻してしまふ、かやうに一定の姿勢を維持するには、身體は絶えずこの複雑な働作を繰り返へし、非常な勢力を費やさねばならない。それ故、乳兒が今までしたこの新しい新姿勢を執るには、感覺器と神經系と筋肉系との働きが、何れも相當に發達し、しかもそれ等の連絡が正確敏捷になつた後でなければ出来ないことであるから、それが人竝みに開けてゆくことは身體の發育の良い證據で、それが人竝みにいかないことは發育の悪い徴候である。しかもこれは神經系と聯關したことであるから、それが人竝みからあまり遅れると、身體の發育ばかりで無く、精神のそれまでも遅れて居ることが疑はれる。

(七) 新らしい運動を始めることが、人竝みより早いか、又はそれより遅れないこと。

誕生後四肢を動かすことが、日に増し活潑になり、三ヶ月めには手に觸れたものを握み、五ヶ月めには手を出して取る、八ヶ月から十ヶ月までの間に這ひ出し、滿一年前後には手放しで歩み始める。これが

一年たつても這へないとか、一年半しても歩めないとか云ふのは、何れも甚だ面白くないあらはれである。

新しい運動を開始することも、新姿勢を執る時と同様、感覺器・神経系及び筋肉系の三者が充分に發育し、且それ等の連絡が正確敏捷にならなければ出来ないことであるから、それが人並みにゆくことは發育上の良徴で、それが人並みにいかないことは惡兆である。又それがあまりに遅れるのは、ひとり身體の發育ばかりでなく、精神の發育までも疑はれる。

新運動開始に當つて、乳兒が努力するときは實にめざましいものである。這ひ始めると一生懸命這ひまわり、歩み出すと何度尻もちをついても厭かず立ちあがる處は、眞に驚嘆に値する。然るに弱い兒はそれが充分でない。

(八) 生齒が人並みより早いか、又はそれより遅くないこと。

六ヶ月から八ヶ月までの間に、下顎の内側の門齒が先づ現はれ、滿一年までには、八枚の門齒が悉く備はり、早い時には第一前臼齒まで生える。

生齒の遅れる兒は、他の發育も亦遅延する傾向がある。

る。

(九) 同一の舉動を反復して厭きないこと。

這ひ出したり、歩み初めたり、一般に新運動を開始する時、この事がよく見られる。元氣な兒であると、數十回同じ運動を繰り返すから、恰も心あつて練習して居るかのやうに見える。遊戯の際も亦同様である。這ひ兒が障子を破ることを覺えると、何度ひき戻してもすぐ這ひよつてつき破る。電鈴の鈕を壓させると、何十遍も試みて喜んで居る。かやうに同一舉動を反復して厭きない兒は根氣の良い兒で、ちぎに疲れる兒は身心共に弱い兒である。

(十) 刺戟に應ずることの敏いこと。

乳兒は刺戟に對して一般に鋭敏である。ほんど手をたゞけばこちらを向き、ぱつと燈がつけばそちらを見る。又少し大きくなると、人からあやされて、笑つたり語つたりする。それが良いのである。しかし一寸したものの音にもびくりとするなど、敏に過ぎ却つて神経の弱い證據である。

(十一) 絶えず活潑に運動すること。

乳兒は誕生當時から、四肢を屈伸し手指を開閉するが、日を経るに隨がつて其の運動が活潑になり、醒

めて居る間は少しも休むことがない。これは良い徴候である。身心共に薄弱な兒は決してさうはいかない。

(十二) 泣き聲に勢ひあること。

泣くには呼吸筋なり喉頭筋なりを働かさねばならないから、泣き聲に勢ひのあるのは元氣のある證據である。産聲を聞いたゞけでも、略その兒の丈夫さが推測される。

(十三) 乳を飲むにも勢ひよきこと。

勢ひよくぐんぐん飲む兒は強い兒で、休み休みちくちく飲む兒は弱い兒である。

乳を飲むには舌や頰の筋肉を、なかなか強く使はなければならぬが、弱い兒はそれに耐えないですぐ疲れる。

(十四) ぱつちりあけた輝いた眼、はればれした顔つき。

細くあけた眼、どんよりした眼、曇つた沈んだ顔つきなどは、皆元氣の乏しいあらはれである。

(十五) 睡眠が深く穩やかなこと。

靜穩な眠りは良徴である、不安なのは惡兆である。睡眠中突然泣き出すとか、うとうととして少しのもの

音にも驚くとか云ふことは、いづれも神経のおちつかない徴である。

(十六) 便通のよいこと。

便は山吹色で一定の形が無くべつとりとして酸い臭ひのあるのが常態である。牛乳で養はれるものゝは、少し堅くて色淺く臭みを帯びる。便通は毎日一二回か、多くても三回を超えないのが常態である。

便の性質が違うとか、それに混り物があるとか、便通が多過ぎるとか、便秘するとか云ふことは、何れも皆異常である。平素かゝることの多い兒は、たゞに消化器に故障があるばかりでなく、全身の健康までも疑はれる。

(乙) 幼兒(滿一年から滿三年位までの)に就いて。

(一) 血色の良いこと。

(二) 堅く太つて居ること。

よく肥えて居るが、もはや乳兒の時ほどではない。

従つてかの贅は次第に消失する。

(三) 皮膚に弾力あること。

(四) 體重が人並みより重いか、又はそれより輕くないこと。

滿一年の兒の平均體重は、男で約二貫四百匁、女で

約二貫二百匁、満二年の兒のそれは、男で約二貫八百匁、女は約二貫六百匁、満三年の兒のそれは、男は約三貫三百匁、女は約三貫である。

(五) 體重が次第に増加すること。

乳兒の時ほどではないが、やはり目立つて増して行く。

(六) 大願門の閉鎖が人並みより早いか、又は遅れないこと。

大願門(ひよめき)は平均十四ヶ月で閉鎖する。これが一年半も二年も閉ぢないのは、頭蓋發育の不良をあらはすばかりでなく、身心の發育の不良なことを示すものである。

(七) 新らしい運動を始めることが、人並みより早いか、又はそれより遅れないこと。

手放しで歩むことが、満一年を少し過ぎてから始まるのは決して遅いのではない。走ること、飛ぶこと、階段を上下することなどは、凡て第二年に始まる。しかし満三年になるまでは一切の運動が確實にならない。

(八) 生齒が人並みより早いか、又はそれより遅れないこと。

満一年までに門齒が揃ひ、第一前白齒・犬齒・第二前白齒と順々に生えて、満二年までには二十枚の乳齒が悉く生え揃う。

(九) 同一の舉動を反復して厭きないこと。

運動に限らず、遊戯に限らず、一つ新らしいことを始めると、根氣よく同じことを繰り返す。お伽噺を聞くにしても亦同様で、親は何度でも同じ噺しを話させられる。

(十) 能く食ひ、能く睡ること。

幼兒は身體の小さい割に、なかなか多く食うものがある。食量が不定であるとか、食品に好悪が多いとか云ふことは、他の原因から來ることもあつて、必ずとは云へないが、大抵消化器に故障のある證據である。

(十一) 便通のよいこと。

乳汁以外の食餌を攝るやうになると、便の性質が變り一定の形が出来る。良い便が毎日一二回通じるのは、消化器の働きがよろしい徴である。消化器が健全であれば、幼兒の身體はまづ大丈夫と見て大過なからう。

(十二) 一生懸命に遊ぶこと。

遊戯は幼児の全生活である。苟しくも眼が醒めて居る以上、良い兒なら一心不亂に我を忘れて遊び、決してぼかんとして居るものではない。

幼児は遊戯によつて興味を感じると同時に、又これによつて知らず識らずの間に身心を鍛鍊するものがあるから、熱心に遊ぶ兒は他日熱心な働きてとなり、器用に遊ぶ兒は他日器用な働きてとなるあてがある。

(十二) 言語の發達が、人並みより早いか、又はそれより遅れないこと。

單語は乳兒の時からあるが、皆名詞ばかりである。

第二年に入ると種々の品詞が出来、又二語以上續けて話すやうになる。滿三年頃になると、不完全ながら言語によつて自分の意志を他人に通ずることが自由になる。言語の發育が甚だしく遅れるのは、多くは精神の發育が良くないことを表はして居る。

(十四) 舉動活潑、言語明瞭なること。

運動其の他一切の起居動作がきびきびして居るのは、身心共に健全な證據である。言語應答がはきはきして居るのは、頭腦の明晰な表現である。

(十五) よく見、よく考へ、よく尋ねること。

よく觀察し、よく思考し、又よく質問する。質問は「なにが」から始まり、「なぜか」「どうしてか」が相ついで出て来る。

(十六) 云ふことに道理あること。

良い兒はなかなか頭腦明晰なものである。幼いからとてあまり無理屈を云ふものでない。考への筋はよく徹つてゐる。たゞ其の理屈たるや、複雑になつて我々の頭腦では到底測り知ることの出来ないほど簡単な理屈である。

(十七) 器用で注意深いこと。

器用不器用、注意不注意は、遊ぶ所を見て居るとよくわかる。

又良い兒は、いくら遊んでも手足や著物を汚すことが少なく、いくら駆けまわつても、轉んだり、落ちたり、怪我したりするやうなことは滅多に無い。これは體が器用に利くこと、無意識の間に注意が行き届くためであらう。

(十八) 無邪氣ですなほなこと。

「ことも」らしい「ことも」でなければならぬ。ませたもの、ひねくれたものは皆良くない。

(十九) 涼しい眼、締つた口、にこやかな頬。

これ等は何れも良い表はれである。

男の兒は強い、なかなか親の手にあまる。女の兒は優しい、よく泣き、よく笑ひ、又よくしゃべる。

これまで書き列ねた事のうちには、その一つを缺いても大に用心しなければならぬものもあるが、又そのいくつかを失つても格別心配するに及ばないものもある。しかし、かやうな徴候が多く備つたもの

落成記念講演會

名古屋 松若幼稚園

先號本誌の餘白を汚し「我園の一日」を御覽に入れました其記事に於て既に御承知ではございませうが當園は昨年園舎の新築を企て本年三月粗末なる形ばかりの物が出来ましたが其後種々の事情の爲に落成記念式を擧げる事が出来ませんでしたがいよいよ来る十月中旬記念日を以て聊か擧式することになりました。

就ては之を憶する爲に幼兒の遊戯會、製作品陳列位の簡單なる催しの外に尙一層社會的に教育的に斯道の爲に貢獻したい考から我國兒童心理學の泰斗であらせらるゝ富士川游先生を聘し三日間の記念講演會をいたすことになりました今左に項目をあげ御紹介いたしますから當幼稚園、小學校職員の方は勿論縣下近縣の方々も奮つて御參會下さる様希望いたします。

ほど、良い兒であるあてが多く、それが足らないものほど、良くないあてが多いと云ふことだけは、確かに云ふことが出来ると思ふ。

重ねて云ふが、この兒が良い兒であるか否か、それは神ならぬ人の心で、たやすく測り知ることは出来ない。我々はたゞその兒が成人した後、その身心共に優秀であるのを見て、始めてあの當時のあの兒は、眞に良い兒であつたなど云ふことを覺り得るばかりである。

因みに、遠來の保姆様御宿泊の向十餘者に對し、當園に於て便宜上賈費を以て御取計ひ致します。

一、期日 大正九年十月二十三日午後一時より。

同二十四日、午前九時より及午後一時より。

同二十五日午後一時より。

一、場所 名古屋市中區南武平町三丁目、松若幼稚園。

一、講師 醫學博士 富士川 游先生

文學博士 安藤 弘先生

一、音樂講習 東京音樂 學校卒業生 安藤 弘先生

一、會員 二百名

一、申込期日、九月三十日限り。

一、申込場所、松若幼稚園宛。

以上